

—— 書 評 ——

佐野眞一著『遠い「山びこ」—無着成恭 と教え子たちの四十年』

吉 岡 剛

は じ め に

これは書評というよりも図書紹介というべきものかもしれない。書評といえば、批評をともなった評価というのが通念であろう。確かに如何なる物事も完べきでは有り得ないから、何らかの形で衝くべきところがあるはずである。したがって、書評は多くの場合、紹介に賞賛が加わって最後に批判なり注文が付くのが一般である。そこで或る程度新しい知見が拓がることになる。しかし、時にはそれは著者の反論を呼んで論争になる。その結果は或る種の石の投げ合いで終り、多くの場合、それで実りがあるというものでもない。もし両者が折り合ったとすれば、それはその掛け合いが互いに遠慮気味な発言であった時のみであろう。

ところで、批判の非常に困難な書物もある。たとえば、資料と捉えてよいような事実の採取、特に歴史的事実の蒐集がそれである。同じ歴史の研究者間でも、歴史観や事態の解釈のような理論面に関しては比較的よく批評の対象となりうるが、もし事実の積み重ねそのものであれば、多少真偽や不足部分は指摘できても、資料の適不適については、著者とほぼ同様の水準に立つ研究者でなければ、一般に不可能であろう。

ここに取り上げた書に関して、評者は遺憾ながらそれだけのものを持たない。しかし、内容に関しては同時代を生きた者として、事実を時代相の中で再確認する力は持っていると思う。したがって、その限りでこの書に考察を加えていこう。

1. 戦後教育改革の一つの象徴「社会科」

昭和22年に始まる教育制度改革のうち、教育の現場に最もインパクトを与えたのが新教科「社会科」の導入であることを誰も否定しないであろう。CIE の示唆により、日本側が構想し始めていた自発的な教育改革に突然割り込んだこれは、一方で民主主義教育を模索する教師たち

に、従来とは違うものを感じさせて光を点じたが、それは洞窟の壁面をそこはかとなく照らす蠟燭の火のようで、核心は見え、他方、大変な頭脳労働と困難な意識改革を求める災いある代物であった。社会科カリキュラムの編成と内容の構成、そして実際の授業展開を模索して、教師たちは時間を割いて討議し、案を巡らし、更に研究会に参加し、各地で開かれる研究授業を争って参観したものであった。

しかも、なお、芯は愚か蠟の成分すらなかなか見えず、夜遅い帰宅を揶揄する「ちょうちん学校」なる仇名のみが自嘲的に残ったのである。これに何よりも保護者からの各種疑義や突き上げが後を継いだ。この時期を称して後に「這い回る社会科」という表現が奉られたが、まさに現場は四苦八苦したのであった。したがって、その精髓をなした「問題解決学習」という方法概念が、其の後相次ぐ『学習指導要領』の改訂で社会科の要件から次第に離れていく時代動向は、現場教師にとっては或種の救いとも感じられたといつてよい。一方で、社会科の原点を重視する考え方に共鳴しつつも、他方で治まるべきものへ治まりつつある観を持たせたのであった。そのUターンの結果が、他の要因も加わって今各種問題を生み出しては来ているということとはできるとしても。

その意味で、この文は感傷書評というべきものであろうか。センチメンタル・ジャーニー（感傷旅行）があるように、記述内容の時代を同じく生きたが故に、結果的に回顧的に跡づけて、そこに意味を見ようとするものである。元来、書評対象としてはこの書自体が研究論集にそぐわない嫌いがあるが、別の意味で注意を喚起し、時代や事柄を改めて見直すことの有意義性を恐らく確認することが出来るのではなかろうか。特に本論集の編集意図の一部に、読者でもある学生への学校教育および教育学に対する関心の喚起がある以上、この書の内容は、取り上げられて然るべきものと考えられる。

2.『山びこ学校』の出現

民主主義教育に関し、コア・カリキュラム論など、現場で教師たちが悩み抜いていた昭和26年（1951）、衝撃的な書物が出版された。それが本書のタイトルにある無着成恭の『山びこ学校』である。ただ、このタイトルからは、今日若い世代の読者には前述した苦難多い社会科実践の厳しい実践報告書としてではなく、自然豊かな山村における暖かな子弟交流の牧歌的物語と映るであろう。確かにそれは注目すべき子弟愛と友愛の記録ではある。しかし、決して明るいものではない。むしろ苦しみ多い毎日の生活に追われた少年少女たちの手記である。しかも、この書評の対象である本書、佐野真一の『遠い「山びこ」——無着成恭と教え子たちの四十年』に明らかなように、40年経過した今振り返っても、それは必ずしも成功した教育物語ではない。したがって、この書には、曲折ある多様な人生模様が描かれることになる。

『山びこ学校』の冒頭が、象徴的な詩

「雪」 石井敏雄

雪がコンコン降る。

人間は

その下で暮しているのです。

で始まっていることは有名である。この山形県の草深い山村・山元村を舞台に、43人の中学生が無着から学んだ社会科学習内容が、生活のにおいに満ちた地方言葉で戦中戦後の日本社会を背景にして悲惨な姿で報告されている。内容目次だけを幾つか捉えても、それは次のように明白である。

「母の死とその後」「父の思い出」「病院ぐらし」「杉皮背負い」「学校はどのくらい金がかかるものか」「すみやき日記」「父は何を心配して死んでいったか」「冬の支度」

このうち、江口俊一の戦死した父の遺骨を受け取った作文「父の思い出」は、悲しく辛い状況を強烈に描き出している。雪の日、遠く山形市へ出かけて、「しっかり持っていなくちゃならない」と大事に持ち帰った骨箱からは、ただ一片の位牌しか出てこなかったのである。この文に江口江一の冷静な現実注視の文「母の死とその後」を加えれば、一層その時代の状況が明らかになるであろう。これら数々の生活文の何が人々の心を引いたのであろうか？ 一つは勿論、教師・無着成恭の中学生への迫り方であり、二つは、他ならぬ生徒たちの感性の豊かさと、困難を開開しようとする強い友愛と探究の姿勢であった。そこには「民主主義」とか「生徒主体」とか「現実在即する」とかの当時の合言葉が生きていた。そして勿論それは今も求められるものである。したがって、その実践は今や教育の現場に、以前とは違った意味で改めて希少価値ある例として注目されてよいのである。

3. 其の後への関心、特に生徒たちの動向

当時ベストセラーとして人々の心にこれが起こした感動は、一部で、また、やがては村や教育界の内外で批判を受けないではなかったが、それを越えて、単に感傷からではなく、まして人格形成機能にかかわる教育のことだけに、当然其の後の『山びこ学校』の子ども達について深い興味を持たせるものであった。勿論少し注意していれば、教師無着の変化多い動静は、背景の如何について正確には不明であったとしても分かっていた。彼は上京して駒沢大学で更に学び、伝統ある私立教育機関・明星学園小学校で教壇に立っていた。また、或る時期マスコミで活動し、幾つかの教育関係著作も出している。そして現在、千葉県で僧職にあることは、かつて『山びこ学校』を読んだ者にとっては、その関心のなかで迎えられることである。このプロセスが結構大変なものであったことは、評者が明星学園で直接散見したことからも想像できる。その時、校長遠藤豊や教頭無着の想いと実践とは別に、同居する中学校の教師が、中学生の教

室移動場面で生徒に浴びせた罵声は聞くに耐えないもので、学園の教育が決してうまく運んではいないことを判断させたのである。事実筆者が訪ねた2年後の昭和58年には上記両名はその学園を去ったのであった。

一方、生徒たちはどう生きていったのであろうか？ それを逐一調べることは43人（男22人、女21人）という人数から言って大変なことである。そして、佐野が調査に着手する平成2年迄のこの40年間で社会は激しく変動した。「集団就職」や「金の卵」などという表現は、彼らを翻弄する時代の荒波でその人生模様を複雑に色付けたに違いない。これに迫る著者・佐野真一の活力と努力は驚くべきものである。丹念に一人一人の跡を追い、少しずつ解明していくそのプロセスは、不遜な言い方ではあるが、探偵物語の面白さを味わわせて息をつかせない。その中での予期しない収穫は、無着の実践を大切にした名もない人達の存在と、その孜々たる努力についての発見である。

たとえば、『山びこ学校』の底本となった無着発行のガリ版刷り文集『きかんしゃ』をかき集めて、丹念実直に手書きで複写した山元中学校校長浅倉高文（平成元年死去）の人知れぬ営為がそれであり、また、それを保存すべく努力した山形県立教育資料館学芸員の玉井茂（40歳の若さで昭和58年死去）がその例である。浅倉は表紙の生徒の木版画の版木を学校中シラミつぶしに探して複製したと、佐野は当時の教頭から聴き取っている。一方、我々は佐野の記述から、『山びこ学校』の出版に至る経緯、それに広く関係した人々（竹内好、柳田国男、国分一太郎など）、編集の意図、迂余曲折ある展開、映画化と英訳・中国訳の誕生やユネスコによる注目、そして、『山びこ学校』に対する当時の評価と批判の内容と、更に無着や生徒を含む人々の間の各種軋轢や、其の後の村と学校に見られた変化を詳しく知ることができる。これらは勿論得難い資料として評価できるものである。特に『きかんしゃ』には『山びこ学校』に採録されなかった子どもたちの自然との心の交わりを示す文もあることを指摘した部分は注目すべきものであろう。

この書が解明した生徒たちのその後には、佐野の報告を通して端的に二つのタイプがとり出される。所謂世間的成功者と必ずしもそうとは言えない人達である。そして、成功者は少なく、多くは『山びこ学校』生徒としての注目とは関係なく、普通の市民として「つましく」「ひっそりと」（佐野）生きているのである。そして、既に6人が比較的高い比率で鬼籍に入っていたのである。なお、元々、高等学校に進んだ者は定時制を含めて僅かに4人、大学に進学した者は2人に過ぎなかった。（もっとも当時地方ではそれが普通であった）。そして、都会に働きに出た者が11人。その一例が自衛隊に進んだ川合実である。彼は除隊後そこで得た技術を生かして事業を起こすが、自衛隊入りが無着の教育理念に反しているという心の痛みを長く持ち続けたのであった。そして多くは石井敏雄のように各種苦勞を積み、高野武のように転職を重ね、また多くの女性が一般にそうであったように家庭人になっていた（未婚者2人）。彼らの中学校での特別の学習が、其の後の生活に直接独特の影響を持ったというものではないようである。

書 評

しかも特に、無着の教育が学力軽視へと偏っていたとその後の自己体験から批判する者もいた。そしてこの点無着も後に反省していることが、佐野によって報告されている。無着が昭和45年に編纂した明星学園での教育報告書『続・山びこ学校』（むぎ書房）はこれと関係なしではない。そこで彼は山元村での実践には「生活経験主義的な教育の限界」があったといい、したがって、新しい自分の編著への注目を改めて世間に求めているのである。

佐野の記述の中から注目すべき二人の人物を取り上げよう。その一人が「母の死とその後」を書いて文部大臣賞を得た江口江一である。彼は余人に困難な見事な活動の途中32歳の若さで昭和42年に此の世を去るが、無着との関係は一種劇的であった。彼は卒業後まもなく自分の作文内容を恥じ、その公開に拒否的態度を示すが、無着の教えに従って「働くことが好き」になり「なんでも何故と考え」「いつでも、もっといい方法」をと尋ねつつ非常な努力を重ねて、村の改革に大きな貢献をするまでに至るのである。人は彼を村の恩人といい、山元村の緑の樹々を彼の遺産として感謝しつつ賞賛する。また、佐藤藤三郎は江口への弔辞で「戦後の教育の、あるいは文化の確立は君の中学2年にして書き上げた作文によって打ち立てられたといっても決して言い過ぎではありません」とまで言う。

その当の佐藤藤三郎はまた、『山びこ学校』が生んだ注目すべき一人で、卒業式に代表で答辞を読んだ生徒である。その中で彼は「私達はこの3年間ほんものの勉強をさせてもらった」といい、「私達が中学校で習ったことは、人間の生命というものは、すばらしく大事なものだということでした」と述べたのである。その彼は高校卒業後、大学に行くことなく農業を引き継ぎ、村の現実のなかに生きるが（現在村に残る者、男3、女3という）、一方で村の青年サークルで活動するとともに、農村に関する著作も出し、農業問題評論家として活躍を始める。また、その中で正面から無着と論争するのである。彼は無着から「ある意味では『山びこ学校』の、いや時代の犠牲者だった」と同情され、当の無着はまた皮肉にも佐野眞一から同じ様にとらえられている。佐藤は「出藍の誉」と評せるかどうかは別にしても、独自の考え方と個性を生かした例として、そこに無着の影響を否定することはできないであろう。

4. 無着成恭による教育効果

現在、無着と行き来している者は2・3人に過ぎないという。評者の小学校4～6年の恩師の場合、50年経った今でも毎年のクラス会に少なくとも10人は集まるが、中学生だから違うのか。それとも無着の個性の強さの故だろうか？ もっとも、佐野は無着の鮮やかな転身への反発に一部理由を見ている。

では、一般の生徒たちに教育効果は無かったのであろうか？ 決してそうではない。佐野は一人一人へのインタビューの中から、無着への感謝の言葉を各種拾い出し紹介している。佐藤代里子は、自分が風邪を引いたとき、無着が自分の妹を見舞いに寄越したことを忘れられない

思い出として大事にしており、川合ヤエノは「私らみていなビリから数えたほうが早い生徒にちゃんと手を掛けてくれた。私にとってあんないい先生はいなかった」と懐古し、土屋ヤエは一人一人を大切にしてくれたといい、無着から「地道にたたきあげろ」と励まされた川合哲男は独立独歩を教わったと感謝する。また、石井敏雄は文集『きかんしゃ』を1号から12号迄保管し続けており、入院した母親の看病日記を書いた上野キクエは『きかんしゃ』を持っていることが自分の財産なのだという。そして、圧巻は「父は何を心配して死んでいったか」を書いた川合貞義である。彼は「ああいう先生は2度と現われないと思います」といい、仕事上の訪問先には名刺がわりに『山びこ学校』の文庫版を持参し、更に過去15年間、山元小学校の新入生と新任の教師に、その文庫本を送り続けているというのである。一般の教師の場合と同様、無着は世間的には確かに具体的に目立った影響を与えていないかもしれない。しかし、意識するとしなにかかわらず、無着が持つ教育観の効果は、それぞれに反映し、生き方を支えていったといってよいだろう。

おわりに

とはいえ、これは教育というものの難しさ、教師というものの悲しさを突き付けた書物であるといえるであろう。個々の子育てもそうではあるが、今我々はそのことを認識しながら教育に当たるより他は無い。そして、今後教壇に立つ者もそれを覚悟すべきであろう。人間と人間の営みをそういうものとして率直にとらえるべきなのである。学校教育は、いうまでもなく目に見える効果のみを期して行なわれるものではない。一方、学校や教師がいなくても子はそれなりに育つのである。あるいは学校の教師よりも塾の教師の方が強い影響を与えているかもしれない。少なくとも記憶や技に関係する学習においてはそのようにいえよう。

では、学校教師の果たすべきことは何かということになる。その意味で、この佐野の著書は或種実験のなかから多面的に教育を暴き出し、ネガの中からポジを考え出させる貴重なものをもっているといえる。妬み有り、疑いあり、そねみ有り、怒りあって、悲哀がある。如何なる理念も努力も、結局は人間が人間の社会で行なう営みのはかなさを、この書は突き付けていて余りある。一方、人間性に見る愛と努力の貴さの一片を示す。

山元村は、他の多くの農村同様、「かつて牛1頭、リヤカー1台が貴重品だったが、今は」マイカーが「一家に1台どころか、一人に1台近い普及率を見せている」という。また、その一方で、学歴社会の波にも洗われているのである。

なお、一部校正ミスは兎も角、間違いとして『学習指導要領』の「試案」の文字の抹消が、昭和26年においてではなく、実際は30年であることを最後に一言注意しておきたい。

(文芸春秋社、1992年9月発行、397頁、定価1500円)